

第4回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「ネコシャンプーのぼうけん」

福島県 光南高等学校 二年 矢吹優衣



賢治のまちから
高校生★童話大賞



優秀賞／銀の星賞

『ネコシヤンパーのぼうけん』

福島県 光南高等学校二年 矢吹 優衣

ぼくのおにいちゃんはいじわるだ。たったにさいちがうだけなのに、いつもいばつている。なにかわるいことをすればみんなぼくのせい。ちょっとはんこうするとあたまをざつん！

ぼくがどんなにがんばっても、おにいちゃんにはかてないんだ。ぼくをながせるために、あれこれといろんなイタズラをしかける。このあいだはぼくのかわいがつていてるぎんいろネコのシユシユに、えのぐできいろのトラもようをかいだ。かわいそうなシユシユは、ぼくのベットのうえでふてくされてねむつていた。そのあとぼくはなきながらえのぐをあらいおとしたんだけれど、ママにどんなにもんくをいつても、おにいちゃんがやつたとはしんじてくれなかつたんだ。

なんといつても、おにいちゃんはゆうとうせいだから。

がつこうでもおうちでも、みんなにたいしてはいつでもいいこ。ママのいうことはちゃんとときくし、べんきようだつていちばんできる。できないことなんてなにもない、おにいちゃんはそういう。でもぼくはおにいちゃんのほんしようをしつてる。イタズラだいすきでいじめっこ。まじめなんかじやないんだ。

だけどぼくはまだようちえんでせもチビだし、あしもおそい。いちおうなんでもできるつもりだけど、やつぱりおにいちゃんにはなにひとつかなわないんだ。そしていつだつてわるいのもくるしむのもぼくだつた。このごろはママにもんくをいつてもむだなのがわかつたから、ただがまんしているだけ。こんなのはもういやだ。なんとかしておにいちゃんをみかえしてやらないと！ぼくはそうけつしんした。

おにいちゃんをながせてしまおう。

そろはおもうんだけど、けつきよくなにもいいかんがえがうかばない。そしてきょうもまたおにいちゃんのひどいイタズラにひつかつてしまつた。



「まあ！なんてかっこうなのハル、いつたいなにをやらかしてきたの！？」

ママがひめいをあげた。ぼくのむざんすがたにかおをまっさおにしてにらんでいる。ぼくはぬれたかみをはらいながら、ただだまつてうつむいていた。

「……いけにおちた」

「どうしていけにおちるのよ？　あなたもう『さい』なのよ、しつかりしないとあがないでしょ」

ママはあきれたようにためいきをついて、ぼくのびしょぬれのあたまをツン、とついた。ぼくはほんとうのことをいいつけてやりたかったけど、どうせしんじてくれないのでがまんする。ぼくってなんてかわいそくなんだろう。

「さあさあ、はやくおふろにはいってきれいにして。ふくはせんたくきのなか。タオルはおいてあるわ」

はやくちでいうと、ぼくをバスルームにいくようにうながす。キッチンではママのつくっているマフィンのきじが、とちゅうのままになっていた。おかげしづくりがママのいちばんのしゅみだ。

これじやあぼくのぶんのマフィンは、ひとつへるだろうな・・・・・、そんなことをかんがえながら、しぶしぶとバスルームにむかう。どろとみずくさでよごれたシャツとズボンをぬぎ、せんたくきにほうりこむ。くつしたがぬれていきもちわるい。

「なんでぼくがこんなめにあわなくちやいけないんだ・・・・・わるいのはおにいちやんじやないか」ひとりでブツブツもんくをいうけど、だれにもきてもらえないのがくやしい。このいきばのないイライラは、いまにもバクハツしそうだった。

せつけんのしろいあわが、ふわふわととぶ。ようやくいけのにおいがとれてからだもきれいになつた。からだもポカポカしてあつたかい。やつときもちがらくになつた。

「おにいちやんめ、ぜつたいにやつつけてやるんだから・・・・・」

あわだらけのタオルをにぎりしめて、ぼくはじぶんにいいきかせた。でもどんなにいきごんでもほかのひとにきいてもらえないんじや、いみがない。ぼ



くのイライラはこうやつてひとりでいるときにもんくをいうことで、なんとかおさまっている。でももうげんかいだ。パパがまえにストレスをためすぎると、かみのけがぬけちやうつていつていた。もしかしたらぼくも、おじいちゃんみたいにツルツルあたまになつちやうかもしれない。らいねんにはしようがつこうにいくつていうのに、そんなたいへんなことになつたらどうしよう！ ぼくのせなかがゾワーッとした。それだけはぜつたいやだ。ぼくはいつこくもはやく、このイライラとさようならしないと。

きぶんをひきしめるために、シャワーのおんどをつめたくしてからだじゅうのあわをながす。つめたいけどもちいい。そしてかみのけをあらうために、みずいろのシャンプーhattをかぶつた。はずかしいことにぼくはまだこれなしではあたまがあらえない。おにいちゃんにからかわれるけど、ほんとうのことなのでなにもいいかえせない。これなしでもへいきになれるように、れんしゅうしなくちや。

ぼくはバスルームのでっぱつたところにおいてある、ピンクのシャンプーボトルにてをのばす。
ぼくのだいすきなかおりがするんだ。

おかしなことにきがついたのは、あたまをあわでいっぱいにしてからだつた。なにげなくあらつていたけれど、なにかがへんだ。このかおりはぼくのすきなスズランのかおりじやなく、スッキリシタリングのかおり。どこかでかいだことのあるかおり。

「ああっ！ シュシュのにおいじやないか！」
そう、これはぼくがだいじにしているネコのシュシュがつかっている、ネコ

ようのシャンプーだ！
ぼくはびっくりしそぎて、しばらくうごけなくなつてしまつた。どうしていつもシャンプーボトルのなかみが、ネコようシャンプーにかわつているんだろう。ぼくはぼけーつとするあたまのなかでかんがえた。そしてこたえをみつけた。

おにいちゃんのしわざだ！



ぼくはあたまがまつかにあつくなつた。こんなばかないたずら、おにいちやんしかしない。もしもこれがぼくじやなくてママたちだつたら、どうするつもりだつたんだろう。いや、おにいちやんのことだからぼくがまつきにおふろにいくのをしつついて、わざとさきまわりしてすりかえておいたんだ違う。なんてさいていなんだ、これでゆうとうせいなんてよのなかまちがつてる。

ぼくはいかりでてがふるえた。そしてすぐにあたまをあらうと、いそいでおふろをでた。もうがまんできない、たとえケンカしてもかてなくて、ぎやくにボロボロにされても、もうかまわない。おにいちやんをいっぽつなぐらないと、おなかがばくはつしそうだつた。バスタオルをかぶつて「しごしからだをふく。

おにいちやんなんて、だいつきらいだ！！

「あれ？」

ぼくのみみに、ふしぎなものがきこえてきた。うただ。でもなんていつているのかさつぱりわからない。おんなのこのような、あかちゃんのような、へんなこえ。へんなうたがとおくからきこえてくる。だれがうたつてているんだろう。

それとたいこやスズ、ふえみたいながつきのおともする。どこかでコンサートでもやつてているのかな？

でもそんなことはいまのぼくにはどうでもいい。おにいちやんへのムカムカでいっぱいなんだ。シユシユとおんなじにおいにつつまれて、なんだかネコにでもなつたきぶんだ。でもネコシャンプーをにんげんがつかつて、からだにわるくないかなあ？

ぼくはそんなんぱいにおそわれた。もしへんなびようになつたら、どうしてくれるんだ。そしたらこんどはもういいのがれきれないで、ママやパパはかんかんにおこるだろう。そのときのおにいちやんのかおがみたくつてむねがウズウズする。ママにいっつけてやろう。そうしたらやつとおにいちやんのあくじもおわる。



賢治のまちから 高校生☆対話大賞

ぼくはまだへんなおんがくがきこえるのもわすれて、さつさときがえてキッキンにむかう。

キッキンにいくと、ママがいなくなっていた。つくりかけのマフィンは、もうオープンのながだ。じつくりとやけているのがみえる。どこにいつたんだろう。

ぼくはすこしがつかりして、のどがかわいたのでれいぞうこからおちやをだしてのんだ。あつくなつたからだがすこしおちつく。すると、またへんなおとがきこえてきた。

にかいから、なにかガチャガチャとものおとがする。おにいちゃんのへやらだ。おにいちゃんのへタクソなうたと、おきにいりのうたがながれる。たぶんおにいちゃんはたからばこをいじってるんだ。ビーダマやコイン、きれいないし、キーholderなんかがごちやごちやにはいつている。ぼくにはさわらせないくせに、みせびらかす。とことんいじわるだ。うたのなかみは、まさにおにいちゃんにぴったり。

♪あめあがりはいいろのみち

だれもいないぼくだけのせかいさ

クルクルまわしたパラソルの

みずしぶきがキラリ、ひかつてゐ

だれもいないぼくだけがしゅやく！

よわむしけむしずぶぬれこねこ

ぼくのあしあとにおどろいてにげたよ

あめがあがればなんてことない♪

おにいちゃんは「きげんらしくて、どうせまたぼくのことをばかにするさくせんでもかんがえているんだろう。でもなんでこんなにはつきりときこえるんだろう。まるでおにいちゃんのへやにいるようだ。みみがよくきこえる。それだけじゃない、マフィンのやけるおとや、れいぞうこのおと、とけいのおと、せんたくきのうごくおと。そしてふつうならきこえるわけがない、お



となりのおうちのおしゃべり「えまではつきりきこえるんだ！」

ママとレティおばさんがおはなししているのがまるきこえ。せけんばなしをしているつてはつきりわかる。ぼくのみみはいつたいどうしてしまったんだ！？

「う、ど、どうしよう、きっとあのシャンプーのせいでみみがへんになつたんだ！ママにしらせなくつちや！」

ぼくはおもいつきりあわててしまい、いちもくさんにげんかんにとびだした。うまくくつがはけないまま、おとなりのおうちにはしる。そとはもうあきらしくなつていた。コスマスやきいろいはながにわにさいていて。ひまわりはちやいろくかれていた。それもめにはいらなくらい、いそいではしつた。おばさんのうちのベルをなんどもならす。するとまゆげをよせたレティおばさんが、お起きながらをゆすりながらでてくる。おばさんのこうすいのにおいはにがてだ。ひとつしなかおのぼくをみたおばさんは、びっくりしていつた。

「あらハルちゃん、どうしたの？ママにようかい？」

ぼくはいきをきらしながら、とりあえずなかにいれてもらつた。ママはリビングでのんびりとくつろいでいる。ぼくのかおみて、あつけにとられたようしている。

「なに、どうしたの。そんなしにそなかおをして」

「マ、ママ！ぼくのみみがへんなんだよ！なんかいつもよりいろんなものがきこえるんだ、ふつうじやきこえないようなのも・・・」

ぼくはママにとりすがつて、ひつしにつたえた。でもママはあきれたかおで、ぼくのてをにぎつた。

「はいはい、おちついで。きのうみみそなじしたからでしょう。それにいろいろつてなによ」

「だから、ママとおばさんはなじ「えもきこえたんだ。おにいちゃんがにかいでうたつてるのも、とにかくいろいろ！」

「はあ？きのせいよ。おとなりなんだからきこえるわ。おにいちゃんはべんきようちゅうなんだから、じやましちゃダメよ。おそとであそんできなさ



賢治のまちから 高校生☆対話大賞

い

そういうと、ぼくにクッキーをにさんまいわたしてかえるようにいう。おばさんとのおしゃべりをはじめた。ぼくはもうとりあつてもらえないとわかつたので、トボトボとおばさんのうちをあとにした。ママはおにいちゃんのことをしんじすぎている。わるいまほうにでもかけられているんじゃないかな。

ぼくはどうしようもなくて、ぶらぶらとそのへんをさんぽした。そらはうすいあお。クッキーをたべながらあるく。おいしい。とんぼがなんびきかどんでいる。あおむしのなき「え」がいつもよりおおきくきこえる。うるさくはないけどいまのぼくのこんらんしたきもちにはじやまなだけだ。ぼくはなるべくしづかなところにいくことにした。つらいときやかなしいときにしていく、あのはしょに。

ふときづくと、さつききこえていたみようなおんがくが、またはつきりときこえてきた。こんどはすぐちかくからきこえる。にんげんのこえとはどこかちがう、きのぬけたこえ。それがなんしゅるいもあって、やつぱりがつきのおともするんだ。だれがうたつてるんだろう。ぼくはおとのするほうへあるいていく。

そつちはぼくのだいすきなあきちがあるほうだった。ぼくはむなさわぎがして、しんぞうがドキドキしだした。なにか、ふしきなことがおこるようなよ

かん。

たとえばあめあがりにそらにじがかかる、そんなきぶん。

ぼくはいつのまにかえがおになつていた。

「・・・・・うそ」

ぼくはこおつたようにかたまつてしまつた。ゆめじやないかとおもう。いままのまえにおこつてているでき「」とが、とてもほんとうのこととはしんじられないきぶんだ。

ネコのおんがくたいが、あきちにずらつとならんでいたんだ。



て、そのわきでまたじゅつぴきくらいのねこが、きとかいし、バケツをてやぼうでたたいてる。ふえのおとはくさぶえだつたらしい。さんびきがくさをくちにあてている。でもどのネコもにんげんみたいにたつていて、えがおだつたりすましがおをうかべている。

ぼくはあぜんとしてそのようすを、きのかげからみつめていた。ゆめでもみているのかとおもう。だけどちやんとみえるしきこえる。ネコのうたがあたりにあかるくひびいているんだ。こわいような、ドキドキするような、ふしぎなきぶん。こんなのを見たのはうまれてはじめてだし、せかいじゅうでぼくだけだろう。ネコたちはみんなリズムにのつて、とてもたのしそうにえんそうしている。なんだかぼくまでおどりだしたくなっちゃう。

そうしてしばらく、ぼくはじべたにすわりながら、ゆかいなネコのおんがくたいのえんそうをきいていた。

ふとめをあけると、えんそ者はおわつていてあたりがしづかになつていた。ぼくはねむたかつたのですぐにはきづかなかつたけれど、いつのまにかひろばからはネコたちのすがたがきえていた。あんなにたくさんいたのに、どこにいつてしまつたんだろう？　ぼくはあわててたちあがり、ひろばにはいつていつた。しづかになつたひろばにはネコのこいつぴきいない。まさかゆめだつたのかな・・・。

ガサツとはやしのおくでおとがした。ふりむくとそこにはぎんぱつのおとこのこがたつている。ぼくよりすこしおおきいくらいで、おにいちゃんとおないどしかもしれない。きょうのそらのようすんだあおいめと、むねについているきんいろのスズがめだつた。ぼくはなんだかしつてているようなきがして、でもだれだかおもいだせなかつた。おとこのこはゆつくりちかづいてくるとぼくにはなしかけた。

「ねえ、きみにおにいちゃんがいるだらう」

「え、いるけど・・・どうしてしつているの」

「いいことおしえてあげる。きみのおにいちゃんがね、きみのママのスカーフをボロボロにきざんじやつたんだ。それはおにいちゃんのたからばこのなかだよ」

「どうしてわかるの？　きみは・・・だれだい」

けれどおとこのこはなにもいわないですこしわらつて、ものすごいはやさではやしのなかにきえていつてしまつた。ぼくはむねがドキドキしている。おとこのこのいなくなつたあとに、ぼくのよくしつているにおいがしたんだ。あまい、リングのにおい。

ぼくはゆうひがやまにかくれるころになつて、ようやくうちにたどりついた。ママはもうかえつていておやつのマフィンもやけていた。ぼくのかえりがおそいともんくをいつて、でもにつこりわらつてあたまをなでてくれた。なんだかそれだけでぼくは、おにいちゃんにされたこともゆるせちやうきぶんだつた。そしてなによりおにいちゃんをぎやふんといわせるヒミツをしつ正在のだから。

「ねえママ、ぼくみちゃつたんだけど・・・」

ぼくがいうと、ママはオニのようなかおになつてにかいヘドスドスあがつていつた。ぼくはごきげんでおやつのマフィンとミルクティをたべていた。にかいからはおにいちゃんのなきれないこえとママのこわいどなりごえがする。これでやつとほんとうのわるもののがこらしめられたんだ。ぼくはまるでたんじょうびをむかえたみたいにうれしかつた。

いつのまにかみみはいつものようにもどつていた。やつぱりきのせいだつたのかな。シユシユがそとからんびりとかえつてくる。いつものようにすましたかお。ぼくのひざにのつかると、おやつをねだつた。マフィンをひとかけあげて、のどをなでるとゴロゴロならす。せなかにはつぱやどろがついていた。ずいぶんたのしくあそんできたみたい。

「よござれちやつたんだね、シユシユ。からだあらつてあげよう」

シユシユはいやそうにぼくをにらむ。ネコはシャンプレーがきらいらしい。うつすらと、リングとマフインのいいにおい。

